

インタラクティブ空間演習 (女子美術大学大学院修士課程)

テキストと〈話す主体〉としての人間

3章 「4. 『テキスト』と〈話す主体〉」 pp.172-179 (2014-12-10)

池上嘉彦 著「III. 創る意味と創られる意味—意味作用をめぐる—」、「記号論への招待」

担当： 石井 拓洋
ishii05042@venus.joshibi.jp

2014

授業資料 Web <http://www.iitak.com/interactive/>

(池上, 45)

【記号論の3つの分野】

- ・意味論 semantics
「記号」とその「指示物」の関係について
- ・統辞論 syntactics
「記号」と「記号」との結合について (統語論、構文論とも)
- ・実用論 pragmatics
「記号」とその「使用者」の関係について (行為論とも)

(pp.172~189)

※ そもそもの出典: W.モリス『記号理論の基礎』(1938) C.S.パースの弟子.

「ミクロ的な整合性」 pp.163 - 168 (池上,163)

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】 (前回)

1. 「ミクロ的な整合性」(文と文との整合性) について

「ミクロ的な整合性」に求められること、それは、前後に位置する文同士の「情報の連続性」

前の文 = 「旧情報」 後ろの文 = 「新情報」

○ ☆ ● ▲ ※

情報「○☆」が前後の文の間で受け継がれている。つまり「情報の連続性」あり。

「マクロ的な整合性」 pp.168 - 172 (池上, 169)

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】 (前回)

2. 「マクロ的な整合性」にみる2つの特徴

特徴1.
テキストの性格によって、「テキスト統辞」の規定は変わる

- テキストのジャンル 毎に〈規定の内容〉が変化する。
- テキストのジャンル 毎に〈規定の拘束力〉の程度が変化する。

例).

- 〈科学論文〉では、段落内を「トピック・展開・結論」として文を配置すべき。
- 〈日常会話〉では、むしろ、もっと〈ラフ〉に話をすすめたい。
- 〈ナンセンス詩〉では、もっと統辞を実験的に扱いたい。

「マクロ的な整合性」 pp.168 - 172 (池上, 170 f.)

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】 (前回)

2. 「マクロ的な整合性」にみる2つの特徴

特徴2.
特定のジャンルのテキストには、明確なテキスト統辞が規定。

- 「なぞなぞ」のテキストでは、「叙述 → 矛盾的叙述」(c.f. 170 f.)
- 「民話」のテキスト (c.f. 171)

民話の例としての「かちかち山」

「テキストと〈話す主体〉としての人間」 pp.172 - 174

【この項のまとめ】

- ・人間がコミュニケーションに加わると様々な問題が生じる。
- ・「コード」と「コンテキスト」の関係の前提として〈主体〉が存在する

「テキストと〈話す主体〉としての人間」 pp.172 - 174 (池上, 42)

「機械的」な伝達 と「人間的」な伝達 (c.f. 42, 復習)

- ・「機械的」な伝達

モールス信号のような伝達。「発信者」と「受信者」にたいしてコードの強い拘束力が作用することで、伝達内容が伝達過程で損なわれない伝達。「理想的」な伝達。記号作用が「閉ざされた世界」。
- ・「人間的」な伝達

人間が関与する伝達。人間による言語活動が典型的。コードの規定を超えるような、未知なる記号(ことば)の生成、解釈を可能とする伝達。そのような記号(ことば)は、コンテキスト(その言葉がうまれる背景、前後関係)が参照される。記号における新たな意味、新たなコード規定が生まれる可能性をもつ。記号作用が「開かれた世界」。

「テキストと〈話す主体〉としての人間」 pp.172 - 174 (池上, 47 f.)

「コード」と「コンテキスト」との関係 (c.f. 47-48, 復習)

- ・コンテキスト context

(文の)前後関係、文脈、コンテキスト; (事柄の)背景、状況。
(「ジーニアス英和辞典・第4版」)
- ・「コード」と「コンテキスト」との関連

「メッセージが全面的に『コード』に依存して成り立っているならば、『コンテキスト』の参照は不要である。他方、逆にメッセージが全面的に『コード』から逸脱しているならば、『コンテキスト』を参照するより他はない」(池上, 47-48)。

「テキストと〈話す主体〉としての人間」 pp.172 - 174 (池上, 173)

「コード」と「コンテキスト」の間をとりもつ〈主体〉の存在

- ・「コード」と「コンテキスト」との関連

「メッセージが全面的に『コード』に依存して成り立っているならば、『コンテキスト』の参照は不要である。他方、逆にメッセージが全面的に『コード』から逸脱しているならば、『コンテキスト』を参照するより他はない」(池上, 47-48)。
- ・二項の関係性の前提には、両者をとりもつ〈主体〉の存在がある
- ・〈主体〉=「主体的に(記号の)解釈を試みる意志と能力」(=人間のこと)

「テキストと〈話す主体〉としての人間」 pp.172 - 174 (池上, 173 f.)

記号作用が「閉ざされた世界」と「開かれた世界」

- ・「閉ざされた世界」

〈主体〉の介入がない場合、コミュニケーション(情報伝達)の場合は「閉ざされた世界」
=記号に新たな意味が見出されることはない世界
=「理想的」なコミュニケーション c.f. 42、「機械的」な伝達 c.f. 42,
=コード依存型, c.f. 48, 科学的なコミュニケーション, c.f. 48。
- 〈開かれた世界〉

〈主体〉が介入すると、コミュニケーション(情報伝達)の場合は「開かれた世界」となる。
=記号に新たな意味が見出される可能性をもつ世界
=「人間的」な伝達 c.f. 42, コンテキスト依存型, 詩的なコミュニケーション, c.f. 48。

「動物の環境世界」 pp.174 - 175

【この項のまとめ】

- ・コミュニケーション(情報伝達)の場としての「閉ざされた世界」とは、コードに拘束された想定内での情報伝達に限られる世界である。
- ・このような世界は、モールス信号のような「機械的」な伝達の中以外にも、虫など、進化度の低い動物の世界で見出される。

「動物の環境世界」 pp.174 - 175 (池上, 174)

進度低い動物の環境 - 記号の「閉ざされた世界」

野生のダニ(虫)の例

- ・ダニは哺乳類の血を吸って生きている
- ・なので、〈血が吸えること〉こそ、ダニにとって大きな意味をもつ。
- ・血が吸えそうな機会を示すのは、哺乳類の酷酸の匂い(=※この匂いが「記号」)
- ・つまり、ダニにとってその記号は最大の価値をもつ。
- ・その記号を感知すると、彼らは血を吸うために、本能的に木から飛び降りる。
- ・その記号の解釈はダニにとって「本能的」である。「主体的」なものではない。
- ・つまり、その記号は新しい意味をもたない(=進度の低い動物の「閉じられた世界」)

「コードの拘束力」 pp.175 - 177 (池上, 175)

【この項のまとめ】

- ・〈開かれた世界〉としてのコミュニケーションは〈主体〉が記号に関与することで拓かれる。この世界は「言語」に典型的に現れる。
- ・「言語」にみられるコードの拘束の緩やかさとは、コードの性質ではない。それは未知なる記号に対応するために、人間がコンテキストを参照することで、コードの拘束を絶えず緩めているものだ。
- ・〈単語レベル〉、〈文レベル〉、〈テキストレベル〉として規模が大きくなることに、言語の統辞コードはその拘束力が弱まり、主体の営みの領域が大きくなる。

「コードの拘束力」 pp.175 - 177 (池上, 175)

〈開かれた世界〉としてのコミュニケーション

- ・〈主体〉が記号に関与することで、コードの拘束の緩和を生む。
 - 記号に新しい意味が生まれるような、記号作用の可能性が〈開かれた世界〉が生まれる
- ・コードの拘束の緩和が、「コンテキスト」を参照した言語の解釈へ

「コードの拘束力」 pp.175 - 177 (池上, 176)

「コンテキスト」のはたらき

- ・「未知なる出来事 (記号) に新たな意味づけをする」こと
- ・「新しいコードをつくる」こと

「コンテキストというものは、...
 そのような新しい出来事 (= 「既成の枠で捉えられない新しい出来事」)
 の起っている場として、その出来事に新しい意味づけを与え、
 新しいコード化へと導く手がかりとして参照」されるもの (池上, 176)

「コードの拘束力」 pp.175 - 177 (池上, 176 f)

記号のまとまりの「規模」による、統辞コードの拘束力の変化

- ・〈単語レベル〉 > 〈文レベル〉 > 〈テキストレベル〉

ことばのまとまりの規模が大きくなることに、言語の統辞コードはその拘束力が弱まる。
 つまり、主体の営みの部分が大きくなる。

〈単語レベル〉の拘束力のある統辞コード : おさくら, ×らさく
 〈文レベル〉の拘束力のある統辞コード : おかしな文でも 大詩人によるものなら、...

「コードの拘束力」 pp.175 - 177 (池上, 177)

〈未知なる記号〉に出会ったときの対処

未知なる記号 (ことば) に出会ったとき、...

1. 〈コンテキスト〉を参照してメッセージを解釈する)
2. 〈コンテキスト〉を想定して、メッセージを正当化する)

「コードの拘束力」 pp.175 - 177 (池上, 177)

〈未知なる記号〉に出会ったときの対処

1. 〈コンテキスト〉を参照してメッセージを解釈する)

「私の娘は男です」!?

- ・この「ことば」のみでは理解不能。「まともな文」ではない。しかし、...
- ・二人の老婦人が、結婚した自分たちの娘に生まれた子供のことを語りあっている) このような背景・文脈・前後関係の中 (= 「コンテキスト」) での発話なら、理解可能。

「私の娘は男です」!? — でも、こんなコンテキストだったら、

1. 奥様、うちの娘ですが、お陰さまで無事に産まれましたのよ。女の子でしたわ。

2. まあ! それはおめでとございます。うちの娘は男の子ですよ。



(c.f. 池上, 186)

画像: http://www.irasutoya.com/2014/05/blog-post_1978.html

「コードの拘束力」 pp.175 - 177 (池上, 177)

「未知なる記号」に出会ったときの対処

2. コンテキストを想定して、メッセージを正当化する)

「太郎は次郎を殺した。でも次郎は死ななかった」!?

- ・さて、この言葉は、「まとも」?、「まともじゃない」?
- ・次郎は死んだ。だから「死ななかった」というのは変。→「まともじゃない」(回答9割)
(国立国語研究所調べ)
- ・しかし、、、「まとも」と回答する人もいる。その理由は?
「テレビでよくあるでしょう? 殺したはずの人が生きていて、また出てくるのが、、、」

→ コンテキストを「想定」しながら、メッセージを正当化する例

「〈主体〉によるテキスト補完」 pp.178 - 179

【この項のまとめ】

- ・「まともなテキスト」には「情報の連続性」が見られる。
- ・しかし、現実のテキストの統發では、本来連続性のために必要な語句が欠如している。そのような欠如箇所 = 「無規定箇所」を、解釈において補足して埋めることで、連続性を再構成するのが〈主体〉である。
- ・〈主体〉はメッセージの生成や解釈において、コードやコンテキストを用いるとともに、自らの「知識体系」と「推論」能力を使用する。
※つまり、〈主体〉は「無規定箇所」を「知識体系」や「推論」によって補うのである。

「〈主体〉によるテキスト補完」 pp.178 - 179 (池上, 178)

「来た、見た、勝った」 (カエサル の言葉)

- ・カエサル = (英語よみ: ジュリアス・シーザー) ローマ共和政の政治家 (前100 ~ 前44)。
- ・カエサルが戦争の勝利をローマに報告するために書いた手紙での言葉。
- ・“VENI, VIDI, VICI” (ウィニー, ウイーディー, ウィーキー) ラテン語。
- ・ラテン語における 明瞭簡潔な文体の手本とされる。

- ・「[私は戦場に]来た、[私は戦場で敵を]見た、[私は敵と戦った]、[そして、私は敵に]勝った」
- ・□内を、我々は、カエサルについての「知識」や「推論」によって補足することで、情報の連続性をつくる
- ・そのことで、「まともなテキスト」にする。

※「来た、見た、勝った」 (フィリップ・モリス社のロゴにも)
“VENI, VIDI, VICI”



画像: <http://moominsappa.blog2.fc2.com/blog-entry-999.html> 画像: <http://blog.livedoor.jp/markzu/archives/51649247.html>

「〈主体〉によるテキスト補完」 pp.178 - 179 (池上, 179)

「コード」・「コンテキスト」・主体の「知識体系」と「推論」

- ・〈主体〉は メッセージの生成や解釈において、コードやコンテキストを用いるとともに、自らの「知識体系」と「推論」能力を使用する。

※つまり、〈主体〉は「無規定箇所」(欠如した箇所)を「知識体系」や「推論」によって補う。そして、「情報の連続性」を得る。

- ・「[私は戦場に]来た、[私は戦場で敵を]見た、[私は敵と戦った]、[そして、私は敵に]勝った」